林田藏書
順數 一一六九号
夢の旅日記稿
函 仁
冊 一
巻 一

# 夢乃旅日記稿

14

きみとの卯の時雨来れ今夜夢想のこと

別のこと

臘雪易消霊液潰黄鸝多外梦中間旅
魂千里無心別伴得東風出岫雲
谷口戸を著ふくのてふこひの
つる風の吉きを洞り深く隠し村水いと尋く
少ふかるる施薬無て笑し

六十六老人よ拙筆

村巖屏立碧溪邊雲雨前成幾万千倘
使魯般取繩墨立夫不日可階天

百雉鎌城堅不抜将軍投鈇海波枯白
龍一怒赤龍斃鶴殉爪牙八百夫

笠根路や雲も我よりおくれ
ゆくを見送りいもるる

沖洋の宿

清見の関

伊勢の海や神路山の方

千里駐程且破程
使君憐老別離情留舟長揖煙霞外花
柳交加古錦城

鉄杉嶺雲追畫艦海門桜轡只一瞬休
恨風花作雪飛芳名長傳青葉笛
此ころの夏の季月は
いかやすきこそ
もれしひの夢
曽ておたやかのく
やすくこそ

姫路より生野へ通う山路にて

鴻原の青楼

遠山眉黛相湯羨鴛鴦繍裳珠玉鈿秋月高升十二樓上無人不酒面

大比叡を仕のこと
[illegible]
七月七日三井寺
三井流泉去入江満江風色在幽窓吟
筵待得蘭盆月一百八聲梨興撞
栄津の宿
あさなの井のうち家もさもしるし
おりのなりやうかなるらん
醒ヶ井の宿
[illegible]
水もまた不破の関をも名のみして井ゟ
不破の関
あれはてゝすゝやなるらん
野ゟの風のすゝきをしのぶらん
青墓
青墓ゟ垂井の駅ゟ関ゟ
小や行らん
[illegible]
世のあをうれ夢やうらん

大比叡を仕のこ…

…

…

三井流泉去入江満江風色在幽窓吟

延待得蘭盃月一百八聲梨與撞

茅津の宿

あさ…井のうち…

…

醒ヶ井の宿

…

…

水…

不破の…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

小野の滝まで光葉々はまだ来ぬ小の名のごとく
滝もあるや山もかすみの中にて
実もなき梅の花

心なく谷の雪間をたどりても
をの〻滝もや梅や名ばかり

さまざまに富士の姫の名をかへて
なりひさごをみやげにぞする

おさなくも我が故郷の山の月を
峯ふかくまで名をみえけるかな

して帰りの心地もせず村里ハ山ふかき谷ゆ
降るあり其出ぬ間そこゝに有きハ名
終ふ富の降て有きハ名
かりぬを梅の香梅ぬの香
梅の香梅ぬの香
梅の香梅ぬの香

小野の滝まで光琳の小の名ゆかしき
滝もあれや山もかすみの中にて徐一画を
写すもまた捨がたき

心ある谷の戸をたゝいて訪くれば
をの〳〵滝をまねや名ある梅
味よくて富士の姫の名もおそろしき
なりをみせ一みどりの花見ぬ山の月を峯よりいでて
おさめぬ秋の水岩小舟の往来をかしく
峯ふかく名もなき鳥の梢より啼こゑ
してやまひの心地もむ村里ハ山ふかき谷
陰ある民家煙そゝぐ垣根の竹きこゆ
終ふ富の姫と有きハ名をつゝみ
かしぬを梢の寒梅のかをりや待ん
梓湖の湯に浴を終こや湯ともる
峯の月の里を終こや湯ともる
あるやうの路のあきの岩の滑津瀬
しの路のあきの岩の滑津瀬
ゆくらの心ちを海ら明
月松ちる

波風の世
越
月
善光寺
越の

安政二年春

多人ゟ拙宅書

4141